

## 萬葉の竹取翁歌について：その特性と隼人的側面

著者	廣岡 義隆
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	8
ページ	25-34
発行年	1997-06-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10076/6508">http://hdl.handle.net/10076/6508</a>

# 萬葉の竹取翁歌について

— その特性と隼人的側面 —

廣岡義隆

はじめに

吹き溜り歌群と評される『萬葉集』巻第十六(注一)の中にあつて、特異な内容を有する「竹取翁歌」について考える機会があつたのでそれを記し、捨て石にでも出来ればと思う次第である。考察に先立って、当該歌をまず示しておく。その本文はかつて私案を提出したことがある。その訓みのままに、ここに掲出する(注二)。

昔、老いたる翁有りけり。号けて竹取の翁と曰ふ。此の翁、季春の月に丘に登り遠く望みけり。忽ちに藥を煮る九箇の女子に値ひけり。百の嬌は儻ひ無く、花の容は匹ひ無し。時に娘子等、老いたる翁を呼び嗤ひて曰ふ、「叔父こち来、此の燭火をや吹ける」といひけり。是に翁は唯々と曰ひて漸に越き徐に行き、座の上りに著接きけり。良久しくありて、娘子等皆共に咲を含み相ひ推譲りて曰ふ「阿誰か此の翁を呼びつる」といひけり。すなはち竹取の翁謝りて曰ふ

「非慮る外に偶に神仙に逢ひぬ、迷惑へる心敢へて禁むる無し、近づき狎れし罪は希はくは贖ふに歌を以てせむ」といひけり。即ち作れる歌、一首。短歌并せたり。

緑子の 若子が身には 垂乳し 母に懐かえ 縮襦の 平生が  
身には 木綿肩衣 ひつらに縫ひ服 頸著の 童子が身には  
結轡の 袂著衣 服し我を 丹ひ因る 子等がよちには 蠟の  
腸 か黒し髪を ま櫛持ち 是にかき垂れ 取り束ね 挙げて  
も纏きみ 解き乱り 童児に成しみ さ丹つかふ 色になつて  
る 紫の 大綾の衣 墨江の 遠里小野の 真櫛持ち 丹ほほ  
し衣に 狛錦 紐に縫ひ著け 刺部重部 並累ね服て 打ち麻  
や 麻統為す児等 あり衣の 宝の子等が 打つ櫛は 綜て織  
る布 日曝しの 麻手作りを 信巾裳成す はしき丹取りて  
為支屋所経 稻置丁女が 妻問ふと 我に來せし 彼方の 二  
綾裏沓 飛ぶ鳥の 飛鳥杜が 霖禁み 縫ひし黒沓 さし佩き  
て 庭に立たずめ 退りな立ちと 禁ふるをとめが 髻髻聞き  
て 我に來せし 水縹の 絹の帯を 引き帯成す 韓帶に取ら  
せ 海神の 殿の蓋に 飛翔る すがるの如き 腰細に 取り

鎗やひ まそ鏡 取り双なめ懸かけて 己おのが果は 還かへらひ見みつつ 春はるさ  
りて 野辺のへを廻めぐれば 面白おもしろみ 我われを思おもへか さ野のつ鳥 来き鳴なき  
翔はたけらふ 秋あきさりて 山辺のへを往ゆけば なつかしと 我われを思おもへか  
天雲あまぐもも い行いきたな引ひく 還かへり立たち 路みちを来きれば うちひさす  
宮みやをみな さすたけの 舍人とねり社やしろも 忍しのぶらひ 還かへらひ見みつつ  
誰たれが子こぞとや 思おもはえてある 是こゝろの如ごとく なししが故ゆゑに 古いにしへ  
ささきし我われや はしきやし 今日けふやも子こ等に いさにとや 思  
はえてある 是こゝろの如ごとく なししが故ゆゑに 古いにしへの 賢さとしき人も 後  
の世よの 堅監かたみにせむと 老人おいぢを 送おくりし車 持もち還かへりけり 昔  
ち還かへりけり

## 反歌 二首

死しなばこそ相あひ見みずあらめ生いきてあらば白髪しらが子こ等に生おひずあら  
めやも

白髪しらが子こ等らも生おひなば是こゝろの如ごとく若わかけむ子こ等に置おくえかねめや

(16・三七九一〜三七九三)

## 娘子等の和へたる歌、九首

はしきやし老夫おきなの歌におおほしき九このこの児こ等らやかまけてをらむ一  
尋たづねを忍しのび尋たづねを黙もくして事ことも無く物言ものことばはぬ先に我われは依よりなむ 二  
否いなも諸もろも欲ほしき随したがに赦ゆるすべき兒こは見みゆや我われも依よりなむ 三  
死しも生いも同おなじ心こゝろと結むすびてし友ともや逢あはむ我われも依よりなむ 四

何なにせむと逢あひは居ゐらむ否いなも諸もろも友とものなみなみ我われも依よりなむ 五  
豈いかも在あらぬ自おのが身みのから人ひとの子この言ことも尽つくくさじ我われも依よりなむ 六  
はだすすき穂ほにはな出いそと思おもひたる情こころは知らゆ我われも依よりなむ 七

墨江すみゑの岸野のきの様ようににほふれど丹にほはぬ我われや丹にほひて居ゐらむ 八  
春はるの野のの下草のよもぎ靡なき我われも依より丹にほひよりなむ友ともの隨意じゆい 九

(16・三七九四〜三八〇二)

## 一 歌群の特性

この竹取翁歌と娘子の返歌九首(以下「竹取歌群」と呼ぶ)は、『萬葉集』巻第十六の中でも際立った存在である。具体的には次の諸点が指摘できよう。

その主人公像

性的倒錯

作り物語的性格

神仙譚的側面

知識人の述作

表記の特異性

右の諸点は主に漢文序と長歌に見られる特性である。この分析に先立って娘子詠九首について瞥見しておこう。九人の娘子がそれぞれ一首詠作し返歌とした形で構成されている点は見逃し難い。ただこれは、その前に位置する櫻兒譚における二首、櫻兒譚における三首と共通する性格がある。主人公(シテ)をとりまくワキ方全員が一首詠作するという点と、詠歌の下に「其一」「其二」及びそれを略した「一」「二」「三」という掲出の仕方が同一である。後補(巻第十六編纂時)の可能性が

なくはない。これは注意を要するところである。また九首中八首までが娘子の第一作（三七九四番歌）の呼び掛けに「依りなむ」（及びその変形）で応えていることを注意したい。リフレインとしての音律性は認められるが、同工異曲の繰り返しであるという点がまた特異である。

では先に掲げた六項目について見て行こう。

【その主人公像】 長歌に描かれた主人公の人物像が他に例を見ない特異な存在である。具体的には以下の通りである。

- ・よい家のお坊っちゃんとして誕生したと語る冒頭部。
- ・ヘアスタイルに凝った青年時代。
- ・衣服のファッションに充分意を払った青年時代。
- ・ナルシズムに酔い痴れた青年時代。
- ・若年期青年期と老年期との落差を語ることが目的とは言え、その向う見ずで甘えた性向を淡々と語ることができる主人公。

若者の特権は無頼だと言われる。しかし、秩序に基づく大人の社会からすると、これらの無頼性は眉を擧める対象である。それをこの主人公は得々と語る。この露悪的人物は萬葉で他には見ないものである。

【性的倒錯】 前項と関係することであるが、主人公は男性であるのに、一見女性と思わせる描写がある。「……稲置丁女が 妻問ふと 我に來せし」「飛翔る すがるの如き 腰細に取り紡ひ」など。これらについては滝本紀子が指摘してい

る（注三）。

【作り物語的性格】 漢文序、長歌、反歌と続ける作品構成は山上憶良の巻第五に見られる作品に近似している。しかし憶良の作品内容は、現実に立脚して己が生きる世間を見据えた生活文芸であるのに対して、当該作品は九人の仙女をモチーフとした作り物語としての性格を有する作品である。

【萬葉集】 中に見られる「物語」と関係する作品を概観すると以下になるよう。

#### 物語的作品（注四）

A、物語的詞書を有するもの。

- 大伴田主歌（二二二六、二二八）
- 日本琴歌（五八一〇・八一二）
- 松浦河歌（五八五三、八六三）
- 松浦佐用姫歌（五八七一、八七五）
- 桜子歌（一六三七八六・三七八七）
- 縷子歌（一六三七八八、三七九〇）
- 美女歌（一六三八〇三）
- 新婚歌（一六三八〇四・三八〇五）
- 小泊瀬山歌（一六三八〇六）
- 安積香山歌（一六三八〇七）
- 墨江歌（一六三八〇八）
- 怨恨歌（一六三八〇九）
- 恨歌（一六三八一〇）

改縁歌 (16三八一四・三八一五)

志賀白水郎歌 (16三八六〇・三八六九)

B、作品の排列等から物語的結構が推測出来るもの (注五)

磐姫歌 (2八五・八八、九〇左注)

久米禪師歌 (2九六・一〇〇)

大津皇子歌群 (2一〇五・一一〇)

但馬皇女歌 (2一四・一一六)

三方沙弥歌 (2一二三・一二五)

入麻呂死別歌 (2二三・二七)

田部櫛子歌 (4四九二・四九五)

乙麻呂配流歌 (6一〇一九・一〇二二)

物語長歌 (注六)

A、伝誦物語 (説話文学) 的性格の作品。

鎮懷石歌 (5八一三・八一四)

末珠名歌 (9一七三八・一七三九) 虫麻呂

浦嶋子歌 (9一七四〇・一七四一) 虫麻呂

燐歌会歌 (9一七五九・一七六〇) 虫麻呂

真間娘子歌 (9一八〇七・一八〇八) 虫麻呂

菟名負処女歌 (9一八〇九・一八一二) 虫麻呂

斑鳩比米歌 (13三三・三三九)

恋夫君歌 (16三八一一・三八二三)

恋夫君歌 (16三八五七)

乞食者・鹿歌 (16三八八五)

乞食者・蟹歌 (16三八八六)

B、創作物語 (作り物語)

竹取歌群 (16三七九一・三八〇二)

関連歌Ⅱ難住歌 (5八〇四・八〇五)

参考歌Ⅱ貧窮問答歌 (5八九二・八九三)

柿本人麻呂の作品等、作品の指定次第によって例数は一挙に増えてくる可能性を孕みはするが、萬葉の中に見られる物語を右のように概観する。この概観の中で、当該歌は、作り物語として注目してよい作品であると位置付けることが出来る。なお「関連歌」とした「難住歌」は手法とテーマの同一性(若年期青年期と老年期を対比することによって「老い」を描き出す手法の同一性とそのテーマ「老い」の同一性)が指摘できるが、仮構性が稀薄である。また「参考歌」の「貧窮問答歌」は作品構成における「問答」という仮構性を有するが、そのテーマは見聞に基づく「貧窮」であり、その展開にドキュメンタリー性が濃厚であって、当該の竹取歌群の作り物語性とは異質である。このように、この竹取歌群は「萬葉集」における作り物語として特筆できる作品であると言える。この作り物語としての根底に神仙譚が介在していることは明らかであり、それが上代において特異な作り物語性を形成したものと見られる。

【神仙譚の側面】 序の中に「九箇の女子」「非慮る外に偶に神仙に逢ひぬ」という表現がある他、『遊仙窟』に近似した「百嬌無備。花容無匹」の表現が指摘できる(注七)。複数

(九人)の仙女の登場というのは古代説話の型である。次の例が類似のものとして挙げられよう。

・奈具社説話(逸文丹後国風土記、注八)……………八人

・伊香小江譚(『帝王編年記』卷十所収説話、注九)……………八人

・松浦河歌(『萬葉集』卷五、八五三〜八六三)……………複数

ただ「奈具社説話」「伊香小江譚」に見られる羽衣説話においては、他の七人の天女が飛び去って一人だけがこの世に残されるのであり、これが羽衣説話の型であると思われるが、竹取翁歌においては、九人の仙女の第一女(三七九四番歌)の呼び掛けに應えて他の八人の仙女は皆、翁に靡き依っており、この点が特異であると指摘できる。松浦河歌の作品にあっては、女性が複数でありながら単数的性格を有するものであり、これは『伊勢物語』初段(初冠章段)の「女はらから」同様の古代物語性を備えているものである(注一〇)、ここはそれとは異なり、九人の全員が靡き依るという作品構成であり、他に類を見ないものである。しかも、九人の仙女の依って行こうとする契機がこの翁の若年の無頼性への讃美であり、その価値観を肯定しているところがまた特異である(注一一)。これは尋常の仙人物語ではない。神仙譚は遊里に兆した物語であると言われるが、そういう文脈において初めて理解できる神仙性であって、表層的な不老長生に基づく道教思想譚ではない(注一二)。

【知識人の述作】 この長歌の末尾の「古への賢しき人も後の世の堅監にせむと老人を送りし車持ち還りけり」の箇所が、

「孝子伝」に依拠した表現である。「奈良人の哥なる事しるべし」(賀茂真淵『萬葉考』)「おそらくは漢文學に耽りし異俗先生の作ならむ」(井上通泰『萬葉集新考』)「むつかしい漢土の故事などを引用した點などから、この作者は山上憶良ではないか」(鴻巣盛廣『萬葉集全釈』)「作者は漢學に長けてをり……」(佐佐木信綱『評釋萬葉集』)等と言われる所以である。この箇所の典拠「孝子伝」を次に掲げる。本文は西野貞治によるが(注一三)、ここにその試訓を併せ掲げる。

孝孫原谷者楚人也。其父不孝。常厭父之不死。時父作<sub>レ</sub>輦入<sub>レ</sub>父。與<sub>二</sub>原谷<sub>一</sub>共擔。棄<sub>二</sub>置山中<sub>一</sub>還<sub>レ</sub>家。原谷走還。齎<sub>レ</sub>來載<sub>二</sub>祖父<sub>一</sub>輦<sub>上</sub>。呵<sub>レ</sub>噴云「何故其持來耶」。原谷答云「人子老父棄<sub>レ</sub>山者也。我父老時入之將<sub>レ</sub>棄。不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>更作<sub>一</sub>」。爰父思<sub>レ</sub>惟之。更還將<sub>二</sub>祖父<sub>一</sub>歸<sub>レ</sub>家。還爲<sub>二</sub>孝子<sub>一</sub>。惟孝孫原谷之方便也。與世聞之。善哉原谷救<sub>二</sub>祖父之命<sub>一</sub>。又救<sub>二</sub>父之二世罪苦<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>賢人<sub>一</sub>而已。

(舟橋家本・古本孝子伝)

孝孫原谷は楚の人なり。その父不孝にして、常に父の死<sub>し</sub>らずあるを厭へり。時に父、輦を作りて父を入れ、原谷が共担ひて、山の中に棄て置き、家に還りぬ。原谷走り還りて、祖父を載せし輦を齎<sub>レ</sub>來る。呵<sub>レ</sub>噴て云ふ「何の故にかそを持て來つる」といふ。原谷答へて云ふ「人の子、老いたる父を山に棄つればそ。我が父老いたる時に入りて棄てむに、更作ること能はず」

とこたふ。爰に父惟を思ひ、更還りて祖父を將なひ家に歸り、還孝子と爲りぬ。惟ふに孝孫原谷が方便そ。世に聞くに、善きかも原谷は祖父が命を救ひ、また父が二世の罪苦を救ひつといふ。賢しき人と謂ひつべきのみ。

楚人孝孫原谷者至孝也。其父不孝之甚。乃厭患之。使「原谷作」釐。祖父送「於山中」。原谷復將「與還」。父大怒曰。「何故將「此凶物」還」。答曰「阿父後老復棄之。不能「更作」也」。顔父悔悞。更往「山中」迎「父率還。朝夕供養。更爲「孝子」。此乃孝孫之禮也。於是閨門孝養上下无「怨也」。

(陽明文庫本・古本孝子伝)

楚の人、孝孫原谷は至孝のひとそ。その父、不孝にあること甚くして、乃ち厭ひ患へり。原谷をして釐を作らしめ、祖父を山の中に送れり。原谷、復「與」を將ちて還れり。父、大きに怒りて曰ふ「何の故にかこの凶物を將ちて還れる」といふ。答へて曰ふ「阿が父、後に老いて復棄てむに、更作ること能はず」といふ。顔ちに父悔悞みて、更山の中に往き、父を迎へ率て還り、朝に夕に供養し、更孝子と爲れり。これ乃ち孝孫の礼そ。是に、閨門孝養し、上も下も怨むること無し。

西野貞治によると、この「孝子傳」は、『太平御覽』に収められた逸文以外には見られない佚書であるという。この「孝子傳」を間接的か直接かは別として、長歌作者は知っていたこと

が確實である。序の「遊仙窟」を踏まえた四六文的漢文と共に知識人の述作と見てよいものである。

【表記の特異性】 表記は卷十六編者の手の可能性があり、即断は出来ないが、当該長歌独自の用字と難訓があり、これらは当初から長歌に存した可能性が高い。前項の「知識人の述作」と関わるであろう。

その用字の特異性について古屋彰は音假名「迹」(ト乙類)、「矣」(ヲ)、「異」(ケ甲類)、訓假名「將」(ム)の使用を指摘している(注一四)。その他に難訓「刺部重部」「信巾裳成者之寸丹取為支屋所經」「如是所為故為」(重出)がある。私は冒頭に示したように右の難訓箇所の一部について訓む努力はしたが(注一五)、なお訓み得ない箇所が多い。表記の面で「堅監(かがみ)」「腰細」「丁女」などの特殊な用字が比較的多いことも挙げられる。神田秀夫による、「吾」字に対して「我」字の使用率が高いという指摘もある(注一六)。

## 一 隼人の職職掌

この特異な光彩を放っている竹取歌群の作者は不明である。山上憶良説(注一七)や高橋虫麻呂筆録説(注一八)があり、あるいは田辺福麻呂の色合いもないではないが(注一九)、目下のところ不明という以外にはない。この不明の作者について「不明」として放置するのではなく、ここに、隼人がいささ

かあるのではないかというデッサンを描くことによって、多少なりとも竹取歌群形成の一端を窺うことが出来ればと思う次第である。

単人は『枕詞燭明抄』に、「日向大隅薩摩の国の俗、皆単人也。其たけく烈しきこと単のことしと風土記に見ゆ」(注二〇)とあるように、日向大隅大隅薩摩に蟠踞した人々の称であり、『新唐書』東夷日本伝には「有邪古波邪多尼三小王」とあって、波邪地域をその根拠地としたことによる呼称であると考えられている(注二一)。

この単人は朝儀において吠声を発することによって知られている。火酢<sup>ほあそ</sup>芋<sup>うも</sup>命<sup>みこと</sup>の苗裔<sup>ほろひのち</sup>、諸の単人等、今に至るまでに天皇の宮墻<sup>みやかき</sup>の傍<sup>そば</sup>を離れずして、代に吠ゆる狗<sup>いぬ</sup>して奉事<sup>ほうじ</sup>する者なり。

(『日本書紀』神代下、第十段一書第二条)  
このことは、萬葉にも「早人の名に負ふ夜音」と歌われている(巻十一、二四九七番歌)。

『延喜式』に見られる大要は以下の通りである(注二二)。

・単人司率二単人、分立二左右朝集堂前、待開門一乃發聲。

(巻七、神祇七、踐祚大嘗祭式)二〇八頁  
・凡元日即位及蕃客入朝等儀、官人二人、史生二人率二大衣二人、番上單人廿人、今來單人廿人、白丁單人一百卅二人、分陣二應天門外之左右。群官初入自胡床一起。今來單人發二吠聲三節(蕃客入朝、不在吠限)。  
…中略…。

凡踐祚大嘗日、分陣二應天門内左右。其群官初入發吠。…中略…。凡遠從駕行者、官人二人、史生二人率二大衣二人、番上單人四人、及今來單人十人、供奉。其駕經二國界及山川道路之曲、今來單人爲吠。

凡行幸經宿者、單人發吠。但近幸不吠。

凡今來單人、令二大衣習吠、左發二本聲、右發二末聲。惣大聲十遍、小聲一遍、訖一人更發二細聲二遍。

凡大衣者、擇二譜第内、置二左右各一人。教導單人、催二造雜物、候、時令吠。…中略…。

凡番上單人廿人。有闕者取二五畿内及近江丹波紀伊等國單人幹了者、申省補之。不在給二時服及糧之限。

凡應供二大嘗會二竹器熬筭<sup>イリ</sup>七十二口、燂籠七十二口、…中略…。

年料竹器。薰籠大一口料、篋竹五十株。中一口料、篋竹卅株。漉紙簀十枚料、篋竹各廿株。茶籠廿枚料、篋竹各六株。

凡造二竹綾判吠、…中略…。

凡年料雜籠料、竹四百八十株、用二司園園竹。…。

(巻二十八、單人式)九七八〜九八二頁  
右の記事の要点は次のようになる。

・踐祚大嘗祭や元日即位等の儀礼時に、単人は官人に率いられて朝集堂(応天門)の左右に分陣し、今來の單人が吠声

を發した。

・天皇の行幸の際にも、国界や山川道路の限等で、今來の単人は吠声を發した。

・竹製品の生産に従事した。

また『職員令』（単人司）には次のように記されている。

正一人（掌。檢・校・単人及名帳）。教・習・歌・儺。造・作・竹・笠・事。佑一人。令史一人。使部十人。直丁一人。單人。

（養老令『職員令』60單人司）

ここには單人司の任務として、單人とその名帳の管理と共に、

・歌儺を教習すること。

・竹笠を造作すること。

が挙げられている。この長官の任務中、「歌儺」と「造作竹笠」とは、單人そのものの職務と理解して良い。

『延喜式』は平安朝の規程であり、応天門の呼称も平安朝代のものであるが、平城宮西南隅の井戸から單人の櫛十六枚が出土しており（不要となった櫛を井戸裡に転用したもの）、平城京の時代にも朝堂院前での單人による左右分陣があったと一般には見ている。

歌儺は單人舞と言われるものであり、『日本書紀』『続日本紀』にその記事がある。

饗・單人等於明日香寺之西。發・種々樂。

（天武天皇、十一年七月戊午条）

賜・宴文武百官并單人・蝦夷、奏・諸方樂。

（元明天皇、和銅三年正月丁卯条）

天皇御・西朝。大隅・薩摩・國單人等、奏・風俗歌儺。授・位賜・祿各有・差。（元正天皇、養老元年四月甲午条）

儀礼における吠声や歌儺は晴の儀である。これに対して、竹等々の竹製品を作ることは日常的生産であり曇の業務である。

單人は日常的に竹製品の生産に従事すると共に、晴の儀礼の折にはまた格別の任務を負っていたと見てよい。

古代には部民として特定の氏族と生産業務の固定が見られ、

「品部」には当該長歌中に出る「飛鳥香縫」（十二戸）などの

詳しい規定があり、また鍛戸・篋戸などの「雜戸」も存した。

現在確認出来る品部・雜戸中に、竹製品の製作担当の部民は他に確認できず、一方、單人には儀礼の担当と職種の固定という

二面があることから、單人はこうした部民の一種と見てよいであろう。直木孝次郎は古代「人制」による呼称が「單人」であり、皇室直属の部民であったと見ている（注二三）。従うべき

であろう。時代が下るとその生産従事者の賤民化が指摘されているが（注二四）、これは上代にあっては関わりないことであり、この單人も良民であったと推測される。

おわりに

單人と竹製品の生産が、古代職制から不可分のことであることが明らかにできると、この竹取歌群に出てくる竹取翁は

単人の一人であると押さえることが出来る(注二五)。

ここまでは明確なことであるが、この先が明らかではない。

この竹取歌群は単人一族の作になる作品であるのか、単人はその詠作素材(対象)に過ぎないものなのか、それともその原形は単人集団の中で単人儂を伴って歌われた伝承歌謡であるのか、決め手に欠けるのである。

明らかなことは、現在見る形は新しいものであるということである。「孝子伝」を引用していることから詠作年代を限定することはむずかしいが、漢文序の中に見られる『遊仙窟』の影響から明確な指摘ができる。山上憶良と同年の張文成が作った唐代の現代小説『遊仙窟』は遣唐使の一員として渡唐した憶良が日本にもたらしたものであり(注二六)、『遊仙窟』を下敷きにした表現が『萬葉集』中に見られるのは、第三期以降の作品に限られることである。よってこの竹取歌群も漢文序に整えられたのは萬葉第三期以降であると言えよう。

なお、単人と大伴氏との結びつきについて、市瀬雅之に言及がある(注二七)。この観点は、巻第十六の編纂ということと或いはかわつてくるかも知れない。

以上、指摘可能なことと一つの憶測とを記し、今後の研究の足がかりにすることができればと思うものである。

## 注

- 一 大久間喜一郎「巻第十六」(『万葉集歌人事典』一九八二年三月)。
- 二 廣岡義隆・真下厚編「口訳付山上憶良全歌集」(中西進編「山上憶良人と作品」一九九二年六月)。この中のB部(憶良作品であるかどうかについて論議のあるものを可能な限り挙げたもの)に当該歌を収めた。このB部作品は脱があるものについて広く採りあげたものであり、当該歌を憶良作と認めているものではない。
- 三 海本紀子「竹取翁歌の一考察」万葉集巻十六有由縁歌について」(『愛知淑徳大学国語国文』第五号、一九八二年一月)。
- 四 巻二の九九番歌など作品の部分に物語的叙述を有するものを除く。
- 五 七夕歌群を除く。また宅守・弟上娘子歌は物語と見ていない。
- 六 範囲を狭く限定。物語の規定次第で、巻十三の歌等、例数は増える。
- 七 『遊仙窟』には「花容婀娜。天上無儔。玉體遙遙。人間小匹。……」。
- 八 神宮文庫蔵「古事記裏書」(勉誠社文庫、所収)。道果本「古事記」附箋(貴重圖書複製会)もほぼ同文。
- 九 一般に「近江国風土記逸文」としているが、その確証がない。「帝王編年記」に収められている古代説話と認定するのがよい。
- 一〇 折口信夫「伊勢物語私記」(一九三〇年三月)。「折口信夫全集」(初版 第十巻所収。最新版「折口信夫全集」第十五巻所収)。指摘としてはノートの方が詳しい。折口信夫「伊勢物語」(『折口信夫全集』ノ一ト編第十三巻。一九七〇年九月。昭和十三、十四年度講義)。
- 一一 村瀬憲夫は筆者の口頭発表に対し、娘たちが手を翻したように「依りなむ」と言うようになる契機に、翁による歌の詠詠(詠歌の力)及び単人舞による興奮状態<sup>エクスサイティング</sup>があるのではないかと指摘した。よい指摘である。私が言う「特異性」の面において、多少差し引かなければならないこと

にはなるが、この村瀬憲夫の指摘に従いたい。

- 二 小野寛「万葉集の『竹取翁』」(学習院女子短期大学「國語國文論集」第二十号、一九九一年三月)では、「八人の娘子の『依る』は……女性から進んで男に靡き寄ることで、結婚つまり肉体的な交渉が暗示されている」とする。

- 三 西野貞治「竹取翁歌と孝子傳原載説話」(『萬葉』第十四号、一九九五年一月)。

- 四 古屋彰「田辺福麿之歌集と五つの歌群—その用字を中心として—」(『萬葉』第四十五号、一九六二年一〇月)。

- 五 注二に同じ。

- 六 神田秀夫「萬葉歌の筆録と萬葉集の編集」(『言語と文芸』五一四、一九六三年七月)。「万葉歌の技法」(『神田秀夫論稿集』所収)。

- 七 鴻巣盛廣「萬葉集全釈」(一九三四年一月)。松岡静雄「有由縁歌と防人歌」(一九三五年六月)。中西進「竹取翁歌の論」(『萬葉集の比較文学的研究』一九六三年一月)。「中西進万葉論集」第二巻 所収)。吉永登「万葉 文学と歴史の間」(一九六七年二月) など。

- 一八 注一六に同じ。

- 一九 注一四の古屋彰論が多少その傾向を指摘している。

- 二〇 下河辺長流「枕詞燭明抄」上、「はや人の」条。「長流全集」上、所収。ただし、古風土記逸文ではない。

- 二一 喜田貞吉「単人考」(『歴史地理』28—5、29—1、一九一六年一月—一九一七年一月)。

- 二二 テキストは『校訂延喜式』(皇典講究所全国神職会編校訂。一九三一年一月)による。頁数は同書のものである。

- 二三 直木孝次郎「部民制の一考察」「人制の研究」「大化改新論」の各論による(『日本古代国家の構造』所収、一九五八年二月)。

- 二四 三谷榮一「竹取翁の物語」(『日本古典鑑賞講座第五巻「竹取物語・伊勢物語」』一九五八年五月)。

勢物語」(一九五八年五月)。中村明蔵「単人の移配と律令国家の形成—畿内制と淨觀觀念にふれて—」(上田正昭編『古代の日本と流來の文化』一九九七年四月)。

- 二五 山崎泰輔に隨取翁とみる考えのあったことが佐佐木信綱「萬葉漫筆」に紹介されている(九八頁)。これだと単人を云々する考えは成立しない。

- 二六 「遊仙窟」将来に関する諸説については、拙稿「真福寺本『遊仙窟』損傷部分復元」(三重大学教育学部研究紀要、第二九巻第二号、一九七八年三月)にまとめている。参照されたい。

- 二七 市瀬雅之「大宰府の家持—大伴氏の伝統と継承をめぐって—」(『中國文學』第十二号、一九九三年三月。同氏「大伴家持論 文学と氏族伝統」(一九九七年五月)に「旅人の氏族意識」として加筆改稿所収)。

本稿締切間際の美夫君志会六月例会で口頭発表した。その際、菅野雅雄、岡本紀子、村瀬憲夫、上野誠の各氏から貴重な御教示を頂戴した。生かせるものは取り入れさせて戴いた。ここに御礼申し上げたい。

(一九九七・六・八)

〔本学教員〕